

メキシコ・カンペチェ州のメノナイト信徒集団

—近代化から逃避するキリスト教再洗礼派のコロニーの形成過程と現状—

国本伊代

◎はじめに

本稿の第一義的な目的は、メキシコのユカタン半島に位置するカンペチェ州に存在するメノナイト信徒集団（以下、メノナイト・コロニーと記す）の定住過程と2010年の現状を概要することにある。第二義的には、1910年のメキシコ革命以降の国民国家形成の過程で受け入れられた「市民権を拒否する非カトリック宗教集団」がどのように変容し、メキシコの社会とどのように関わっているかを考察することにある。

ラテンアメリカ諸国に定住したメノナイトに関して、その転住の経緯、コロニーの組織、信仰と伝統の実態などを調査した研究は少ない。筆者はラテンアメリカ諸国の近現代史を研究する過程で出会ったメノナイト・コロニーに関心を持ち、一連の現地調査に基く論考を発表してきた（文献一覧を参照）。本稿もその延長上にある。メキシコ南東部のカンペチェ州のメノナイトに関する研究は、筆者の知る限り皆無である。筆者が実施した現地調査では、カンペチェ州とキンタナロー州のメノナイト・コロニーを支援するためにカンペチェ州のホペルチェン（Hopelchén）¹⁾に支援センターを置くメキシコ・メノナイト支援団体（Mexican Mennonite Aids, Inc. 以下 MMA と略す）のスタッフ、ホペルチェン在住の引退した農業技師アントニオ・バケイロ（Antonio Baqueiro Buenfil）氏、メキシコ・カ

ンペチェ農業融資協同組合（COACAMEX）ホペルチェン事務所長ルイス・フェリペ・チャンベ（Luis Felipe Chan Be）氏、カンペチェ州のメノナイト・コロニーのひとつであるエル・テンポラル・コロニーの居住者でコロニーの実質的な広報担当の立場にあるヨハン・ノイフェルト・ティーセ（Johan Neufeld Thiesse）氏から情報の提供を受けた。コロニー訪問の案内役として筆者を全面的に助けてくれたのは、ホペルチェンに住み、メノナイト・コロニーに多くの知人をもつタクシー運転手のホセ・ワトソン（José Watson Lugo）氏である。多くの情報を提供してくれたこれらの人びとに感謝の意を表したい。

Ⅰ 流転の平和主義者メノナイト信徒

メノナイトとは、16世紀前半のヨーロッパにおける宗教改革の中で誕生したキリスト教再洗礼派（アナバプティスト）の本流に位置する宗派である。再洗礼派の名称は、中世ヨーロッパの国家教会の下で義務づけられていた幼児洗礼を否定し、「神の言葉」である聖書の教えを理解した上で自分の意志で洗礼を受けることを主張して、改めて「成人洗礼」を行なったグループに由来する。キリスト教（カトリック）の秘蹟のひとつである幼児洗礼の拒否は、教会法の違反として厳罰に処されていた当時、再洗礼派は迫害と処刑を含む厳罰を受けた。

宗教改革が教会の腐敗と墮落に対する告発に始まり、聖書の教えに忠実に従って信仰の原点に戻ろうとした16世紀の宗教改革運動のなかで、再洗礼派は聖書の教えを文字通りに体現して生きることを決意し、かつ努力した人びとであった⁽²⁾。彼らは粗末な衣服に身を包み、贅沢な飲食物を拒否し、人と争わず、神の定めた農業従事者として日々の生活を営むことに固執した。誓約と国家教会を拒否し、いかなる手段であれ人と争うことに反対する絶対的平和主義を主張したことによって、スイス、ドイツ南部、オランダを中心に広まった再洗礼派は、いずれの地においても激しい迫害に会い、都市から農村や山村へ逃避し、転住し、分散していった。このような迫害と受難の中でオランダを中心とする低地地方の信者をまとめたのが、オランダ生まれの元カトリック司祭で、再洗礼派運動の指導者の一人メノー・シモンズ（Menno Simons; 1496～1561）である。このメノー・シモンズの名をとって彼らはメノー派あるいはメノナイトと呼ばれ、スペイン語圏ではメノニータとして知られている。現在のメノナイトは16世紀の再洗礼派の直系にあたり、同じく再洗礼派に分類されるアーミシュとハutterライトはメノー派から分離したグループである。

16世紀に始まるメノナイトの逃避と離散には3つの流れがあった。その1つは新大陸のイギリスの植民地（現在のアメリカ合衆国）への逃亡であり、第2の流れはスイス地方の再洗礼派が辿った東欧への移住である。第3の流れは、低地地方からバルト海沿岸に向ったグループである。1920年代以降にラテンアメリカに転住したメノナイト信徒集団の祖先のほとんどは第3のグループに属する。このグループは、バルト海沿岸からロシア南部のウクライナ地方へ、そしてウクライナからカナダへ、カナダからラテンアメリカへと、約4世紀半に及ぶ流転を経験した。この間、20世紀のロシア革命と第2

次世界大戦で難民となったメノナイトの一部はヨーロッパから直接パラグアイとブラジルに難民として受け入れられ、共同体の信仰と外部の社会との関係に柔軟な対応をとることによって生き延び、現在では受入れ国の国民となっている。一方、カナダ経由で1920年代以降にラテンアメリカ諸国に転住したメノナイトの多くは、受入れ国の国民となることを現在でも拒否している。彼らは、ヨーロッパ、カナダ、アメリカ、ブラジルにおいて一般市民としての生活を営むメノナイトとは一線を画す、原理主義者である。

しかし原理主義者といえども、彼らは90年に及ぶラテンアメリカ域内の転住の過程で変容を遂げている。受入れ国の公教育、感染症に対する幼児の予防接種、参政権、兵役の義務など国民の権利と義務の否定は共通しているが、その他の多くの面で多様性がみられる。メキシコの場合、後述する「特別な地位」によってメキシコ政府により公認された「独自の自治組織の下で暮らす非メキシコ国民」であるメノナイトは、大筋として進歩派と保守派、そしてその中間派に分類できる。進歩派は、電気・自動車・ラジオ・電話などの近代文明の利器を受け入れ、外見的には現代メキシコの農村社会の堅実な農業従事者であり、メキシコの公教育を現在のところ受け入れていないが学校でスペイン語を教え、やがて多民族・多文化国家を自認するメキシコの社会に少数民族集団のひとつとして吸収されていく過程にあるグループとして捉えることができる。

一方、保守派は進歩派が受け入れたほとんどすべての文明の利便性を拒否している集団で、進歩派と対立し、彼らとの共存を拒否して共同体から離脱し、新たなコロニーを建設したグループである。彼らは、いかなる環境にあっても16世紀の宗教改革当時の信仰と規律を堅持し、それを死守できな

い場合にはさらなる逃避地を求めて21世紀初頭においても転住を繰り返している。その結果、進歩派のような経済的安定を達成することは難しく、保守派は一般的に貧困の中で暮らしている。対外的な問題はコロニーの少数の指導者が担い、指導者以外のコロニーの構成員にとってはコロニーの中での労働と信仰と親族間の交流が日常生活のすべてで、彼らに外部世界への関心はない。

以上の進歩派と保守派の中間に位置するグループは、外見的には保守派に類似しているが、コロニーを統括する宗教指導者の有する柔軟性の多寡によって内部の規律や周辺社会に対する姿勢に幅があり、文明の利便性の受入れ方にもコロニーごとに差異がみられる。その結果、外部から電線で導入する電気を拒否する一方でディーゼル・エンジンによる自家発電機を利用し、灌漑用の井戸水の汲み上げや電気洗濯機の使用などが認められている場合がある。しかし自動車と電話の所有は禁じられている。

以上の3つのグループに共通するのは、低地ドイツ語を話し、聖書を読むために高地ドイツ語（現代

ドイツ語）を学習することである。公教育を拒否してコロニー内に設立した独自の学校では、聖書を教材とした高地ドイツ語と初歩的な算数が教えられるが、子供たちがコロニーの外で生きることが想定されておらず、スペイン語は進歩派コロニーを除くと教えられていない。2010年の時点で保守派と中間派が存在するのは、筆者の知る限り、メキシコ、ベリーズ、ホンジュラス、ニカラグア、パラグアイ、ボリビア、アルゼンチン、ウルグアイである。ブラジルとパラグアイの一部のコロニーは、市民権と公教育を受け入れている。本稿が扱うカンペチェ州のメノナイト・コロニーは、保守派と中間派に属する。

II メキシコにおけるメノナイト・コロニーの定住の経緯とその発展

メノナイトのメキシコへの転住の歴史は1920年代に遡り、2010年までの90年に及ぶ定着の過程で大きな変貌をとげているが⁽³⁾、メキシコ政府は後述する「1921年の特許状」に明記した約束⁽⁴⁾を守って、メノナイト信徒集団が独自の宗教共同



図1 メノナイト・コロニーが存在する州
(出所) Update および Telefonbuch 2008-2010 より筆者作成

体として存続することを容認している。メノナイトのコロニーは彼らが最初に入植した北部のチワワ州とドゥランゴ州に集中しているものの、図1で示すように7つの州に存在し、総人口は8万を超すと推定される⁽⁵⁾。

メノナイトの最初のグループがカナダからメキシコに転住してきた1920年代は、メキシコが革命動乱期を経た直後であった。この不安定な時期のメキシコにメノナイトが安住の地を求めた背景には、第一次世界大戦を契機として国民統合を加速させたカナダからの緊急脱出という事情があった。もともとカナダのメノナイトは、近代化を推進したロシアから1880年代にカナダ西部の未開地を開拓することを条件に独自の宗教共同体を保持することが認められて転住してきたグループである。そのカナダが協定を反故にして国民統合のための公教育と徴兵の義務をメノナイトに課したことからカナダ脱出を決意したグループは、新たな転住の地を求めて調査団をブラジル、パラグアイ、アルゼンチンへ派遣し、その過程でメキシコ定住の可能性を知ったのである（国本[1998b]）。

当時のメキシコは、農地改革に本格的に取り組む直前であった。そのため大規模農園主の多くが接収される前に土地を売却しようとしていた。とくに北部チワワ州は革命前のディアス時代（1876～1911年）に鉄道の建設と並行して広大なアシエンダ（大農園）が特定の家族に集中した典型的な州であり、大統領アルバロ・オブregon（Álvaro Obregón; 任期1920～1924年）と緊密な関係を持つスロアガ（Zuloaga）一族がアシエンダの売却を計画していた。先のメノナイトの調査団は、このスロアガ一族と接触し、オブregon大統領から「特別な地位を約束する特許状」を得て、そのアシエンダの一部を買い取った。外国資本を追放し、大土地所有制度を解体しようとしていた革命

政権が外国の宗教共同体に国家権力の及ばない「特別な地位」を認めて広大な土地の取得を許した事実は、メキシコ革命研究の中ではあまり注目されていない。しかしオブregon大統領がメノナイトの代表団に会い、彼らに土地の取得とメキシコ政府の不干渉を約束した特許状を与えたことによって、現在に至るまでメノナイトが独自の宗教共同体をメキシコ国内で存続させることを可能にした（国本[1998a]）。

1921年の特許状でメキシコ国家の不介入を約束されたカナダのメノナイトの一部が、1922年から1926年にかけてカナダからチワワ州およびドゥランゴ州に転住し、図1で示すメノナイト・コロニーが現存する7つの州のコロニーの母体となった。やがて彼らの一部はメキシコ国内だけでなく、先に挙げたラテンアメリカ諸国に新天地を求めて転住していった。メノナイト・コロニーが拡散を続ける第1の理由は、人口の増大による土地取得の緊急性である。十数名の子供をもつ夫婦が珍しくないメノナイトの家族では、家長が絶対的な支配者であり、男児は成人して洗礼を受け、結婚するまで無償で家業（ほとんどが農業）に従事し、結婚によって独立するときに父親は自立のための農地を息子に与えることが義務となっている。したがって多数の子供を持つメノナイトの土地への渴望は強く、メキシコ国内はもとよりベリーズとボリビアの熱帯低地にいたるまで、土地が取得できるところへはどこへでも転住していく。こうしてカナダとメキシコに親族をもつメノナイトは、先に挙げたラテンアメリカ諸国のコロニーに存在し、親族間の交流は密である。

新天地を求めてメノナイトが拡散する第2の理由は、宗教共同体の中で発生する対立から起こる転住である。チワワ州とドゥランゴ州のコロニーでは、1950年代末から1960年代前半にかけてト

ラクターへのゴムタイヤの導入をめぐる激しい対立が起こり、コロニーが分裂して、多くの家族が転出した。もともとメキシコに転住したのはカナダの国民統合に抵抗して転出した保守派グループであったが、メキシコの高度経済成長期の農業の近代化の過程で、禁止されていたトラクターの車輪のゴムタイヤ装着が分裂の原因となった。一部の進歩派は州内に新たな土地を購入して転住し、保守派の多くは従来の共同体の規律を維持するために中米のベリーズと南米のボリビアに土地を求めて転住した（Sawatzky [1971], 国本 [1999], [2003]）。続いて灌漑用の井戸水を汲み上げるための電力の導入問題でコロニーが分裂し、ゴムタイヤ問題と同様に電力の導入に反対するグループが転出していった。この間コロニーの中では、禁じられていた自動車やラジオを密かに所有するなどの共同体の規律違反者が教会から破門され、その家族が孤立した生活を強いられるなど、過酷で痛ましい状況が出現した⁽⁶⁾。本稿が取り上げるカンペチェ州のメノナイトの多くは、このようなコロニーの変容の過程でゴムタイヤ装着と電力の導入に反対してチワワ州とドゥランゴ州のコロニーから転住した保守派であった。ただし電力の導入問題には、単なる近代の利便性への抵抗だけでなく、公道からコロニーの入り口および各敷地にまで電線を敷設する経費の分担金を払えない家族が相当数含まれており、宗教共同体内部の貧富の差も関係していた（Thiesse 証言）。

メキシコ国内でメノナイトが取得した土地の多くは農業に適せず、天候異変に恒常的に襲われる、かつての不毛の地である。しかしタイヤ装着問題と電気の受容をめぐる保守派と進歩派の対立を経て現代の利便性を受け入れた1990年代のチワワ州とドゥランゴ州のコロニーの多くは、半砂漠地を灌漑によってトウモロコシ生産地帯に変えた。

さらに2010年に発行された電話帳からは、彼らが現代社会のあらゆる近代的な制度と物資を享受していることを知ることができる（*Telefonbuch, 2008-2010* [2010]）⁽⁷⁾。しかし他方で21世紀においてもそのような現代の利便性の受容を拒否する保守派は、1992年の憲法改正によってエヒード制が廃止されると、一定規模以上のまとまった土地が安く入手できるカンペチェ州とキンタナロー州に土地を求めて国内移動を始めた。筆者が現地調査を実施した2010年10月の時点で、カンペチェ州には13のメノナイト・コロニーが存在し、隣のキンタナロー州に2つのコロニーが建設され始めたところであった。

農地改革による農民への公正な土地の配分と国民の統合に取り組んできた歴代革命政権がメノナイトの存続に干渉しなかった理由に関する筆者の仮説は、メノナイトがメキシコ人農民の耕作しない不毛の土地に入植し、電気や上下水道などの文明の利便性に関心をもち、ひたすら孤立した宗教共同体として存続することに固執するという、「開拓農民として国土開発に大きく貢献しながら、メキシコ政府にとっては財政出動の必要のない、無害の存在であった」ことである。ブラジルに入国したメノナイト信徒集団が公教育を強制され、ブラジル国民として定住することを求められたのとは対照的である（国本 [2008]）。ブラジル以外のラテンアメリカ諸国に在住するメノナイトは、メキシコのメノナイトとほぼ同様の法的地位にあり、受け入れた国家の干渉も支援も受けず、むしろ「自国民が開拓しない不毛の地に入植することで歓迎された開拓農民」として定住している（国本 [1999], [2001], [2003], [2004]）。ただし政治・経済の混乱期には、警察の介入を拒否するメノナイトのコロニーはしばしば暴徒の標的となったことも共通している。

表1 メキシコ・カンペチェ州におけるメノナイト・コロニー（2010年10月現在）

コロニー名	設立年	家族数	人口数	所有地面積	プロカンポ面積	主な出身地
1 ●ヤルノン	1983	250	1,296	3,600	1,700	ドゥランゴ州
2 ●チャビ	1986	10	505	1,600	900	ドゥランゴ州
3 ●ヌエボ・プログレス	1987	400	2,100	6,500	2,296	ドゥランゴ州, サカテカス州
4 ○ラス・フローレス	1995	40	600	2,000	0	タマウリパス州
5 ●エル・テンポラル	1997	140	828	3,500	0	チワワ州, コアウイラ州
6 △トリニダード	1998	120	650	2,200	0	チワワ州, コアウイラ州
7 ○ラス・パルマス	1998	15	300	500	0	チワワ州, カナダ
8 ●ヌエボ・ドゥランゴ	1999	120	1,044	2,600	0	ドゥランゴ州
9 ○サンタロサ	2000	20	80	3,000	0	チワワ州
10 ○シエラ・ベルデ	2005	20	40	400	0	タマウリパス州
11 ○サンタフェ	2005	20	120	800	0	チワワ州/ベリーズ
12 ○ヌエバ・エスペランサ	2006	10	40	800	0	タマウリパス州
13 ●マラビリヤ	2008	12	142	400	0	ヤルノン・コロニー
合計		1,177	7,745	27,900	4,896	

(出所) MMAホベルチェン支援センターおよび農業融資協同組合ホベルチェン支所の資料をもとに筆者作成。

(注) 1) コロニー名の前の番号は図2の番号を示す。

2) コロニー名の前の○印：●保守派；○進歩派；△印は中間派

3) 面積の単位はヘクタール。プロカンポは農業融資協同組合の融資を受けている面積。

III メノナイト信徒集団を受け入れたカンペチェ州の事情

表1でみるように、カンペチェ州にメノナイトの最初のコロニーが建設されたのは1983年である。1980年代に3つのコロニーが建設されたが、



写真1 保守派コロニーの交通手段である馬車

これら3つのコロニーは2010年の時点においても現代文明の利便性を拒否する保守派である。電気を拒否し、自動車・電話・ラジオを所有せず、農業に限定して認められているトラクターにはゴムタイヤを装着しないという規律を守っているグループである。それを監視するのは各コロニーのリーダーである宗教指導者である。

同表で示された1995年以降に建設された10のコロニーのうち3つのコロニーもまた、保守派に分類できる。保守派のコロニーを見分けるのは容易である。まずコロニー内へ送電する電柱がなく、コロニー内を一巡すると交通や運搬の手段が馬車(写真1)で、たまに見かける車輛は外部から来たものである。一方、進歩派のコロニーでは電柱がまず目に留まり、軽トラックやオートバイが走っている。これらの保守派と進歩派の間に位置づけられるコロニーは、2010年の時点ではトリニダード・コロニーであった。ここでは電気が

入っており、協同組合と資材および雑貨を扱う店には電話があったが、個人が電話や自動車を所有することは禁止されていた。

これら3つのタイプのコロニーの居住者のほとんどは表1でみるようにメキシコ国内の別のコロニーからの転住者であるが、進歩派のコロニーにはカナダやベリーズから転住してきた家族もいる。これらの家族は英語を話す。しかしカンペチェのメノナイトの共通言語は低地ドイツ語で、学校で教える言語は高地ドイツ語（現代ドイツ語）である。ただし学校はたったひとつの教室にすべての生徒を収容して、ひとりの教師がドイツ語の読み書きと算術の基礎を教えるレベルのもので、ドイツ語で読み書きができるレベルに達するものは非常に少ないという（Thiesse の証言）。

これら13のメノナイト・コロニーがカンペチェ州に設立された第1の理由は、州内の土地の取得の容易さにある。それを理解するには、カンペチェ

州の自然環境と植民地時代以来の開発の歴史を知る必要がある。自然環境については、まず石灰岩から成るユカタン半島全体に共通する農耕に適さないという土壌条件が挙げられる。その中でもカンペチェ州は、起伏のある北東部の丘陵地帯、メキシコ湾に沿った沿岸低地地帯、南部の森林地帯からなり、農耕に適した平地は図2で示したようなホベルチェン地区（ムニシピオ）を中心とした平地に限られている。第2の理由は、後述するような開拓農民の誘致政策をとるほど内陸部の開発が遅れていたことである。

カンペチェ州内陸部は、染色材となるパロ・ティンテ（palo tinte）と呼ばれる木材とマホガニーなどの高級家具用の木材の伐採と輸出によって、植民地時代に開発された。独立後はユカタン県⁽⁹⁾の一部に留まり、現在のカンペチェ州がユカタン州から独立するのは、19世紀半ばにユカタン半島全域で起こったマヤ族の反乱（カスタ戦争⁽¹⁰⁾

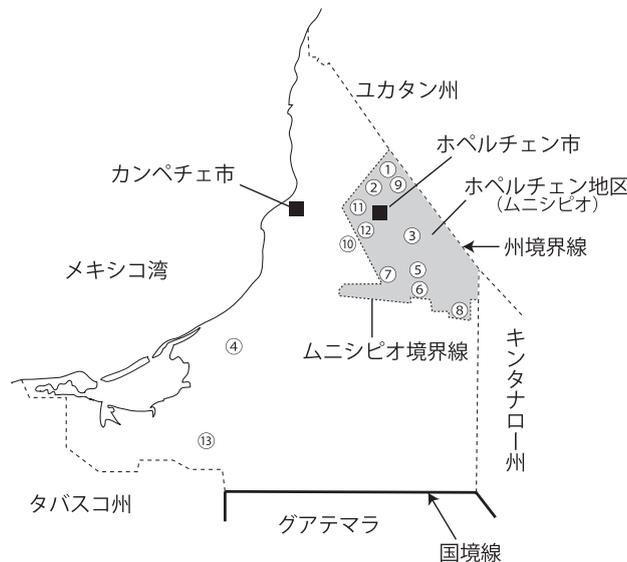


図2 カンペチェ州内のメノナイト・コロニー
 (出所) Update, vol.12, no.12-12 および
 MMA ホベルチェン支援センター提供資料より筆者作成

とそれに続く小規模な蜂起)中の1853年である。しかし自治州となったカンペチェは、カスタ戦争によってそれまで点在していた先住民の集落の多くが消滅し、経済活動が停滞する貧しい州となった。カンペチェ市と海岸地帯に沿って開かれた小規模な耕地でトウモロコシ、フリホール豆、サトウキビ、コメなどが生産され、植民地時代からアグアルディエンテと呼ばれる蒸留酒を製造するためのサトウキビ生産は1910年の革命勃発まで続いたが、19世紀末にユカタン州に一大繁栄をもたらしたエネケン(サイザル麻)はカンペチェ州北東部の狭隘な盆地でしか栽培されなかった。

1883年の移植民法によって登記されていない土地が国有地とみなされ、それらの土地を測量することでその3分の1が無償で譲渡されたディアス時代(1876~1911年)に、アメリカ資本が広大な森林地帯を取得し、希少木材の伐採とチクレ(チューインガムの原料)の採取を大規模に始めた。チクレは、天然ゴムの採取および加工とはほぼ同様な手順で行なわれる。当時は道のない内陸部の森林地帯に点在するチクレの樹液を雨季の9ヵ月間採取するために先住民労働者を送り込み、定期的に最低限の生活物資を送り届け、帰路に採取して固形化されたチクレを引き取るロバの群を率いる運搬役が港と内陸部を数週間かけて往復した。その輸出税が1940年においてすら州政府の租税収入の63%を占め、チクレの採取は重要な経済活動でありつづけた(Peña [1945: 578])。この間の1910年に勃発したメキシコ革命は大土地所有制を解体したが、カンペチェ州で農地改革が本格的に取り組まれるのは1940年前後になってからである。

しかし革命がカンペチェ州を直ちに変革することではなく、1940年代に入っても人口は増加しなかった⁽¹¹⁾。革命後の荒廃と過少人口に悩む州政府

は、1941年に6人の農業、経済、地質の専門家からなる調査団に州内の現状を調査させて州経済の開発の展望を探った。この調査報告書によると、革命が目指した農地改革のモデルであるエヒード制が1940年までに導入され、カンペチェの農民のほぼ全員がエヒードの構成員となった。しかしやせた石灰岩からなる土地、希少木のほとんどが伐採し尽くされた森林と沼沢地からなるカンペチェ州で、農業を発展させることは難しかった(Peña, ed. [1942])。こうして過少人口と未開発に悩む州政府は、1960年代に内陸部開発のためグアテマラ農民を含む入植者を積極的に募集した。しかしその政策も成功しなかった(Cauché [2009])。

このようなカンペチェ州に、過剰人口を抱え、新たなコロニー建設用の土地を求めているドゥランゴ州のメノナイトが国有地を最初に取得したのが1983年である。この取得過程に関する具体的な資料の所在は明らかでなく、メノナイトの土地取得は不透明な手順で未開地の開拓農民として公的には受け入れられたという印象を筆者は持っている。

図2でみるようにメノナイトのコロニーが集中する地域は、古代マヤ文明の遺跡が整備される以前の1980年代までは車輛が入れる道路網は限られており、植民地時代に拓かれた道のみがいくつかの主な集落を結んでいるに過ぎなかった。州府カンペチェ市とユカタン州の州府メリダを結ぶ幹線道路は植民地時代に拓かれた「王の道」として早くから整備されていたが、メノナイトがコロニー建設用に取得した土地が集中しているホベルチェン地区は、森林に覆われた低い丘陵に囲まれたいくつもの狭隘な盆地からなり、メノナイトが取得したのは耕作が放棄されたエヒード農地や未開拓の国有地であった。いずれにしてもメノナイトの土地取得に関して州政府が寛容であったこと

は疑いない。1992年の憲法改正によって革命が築き上げた農村共同体エヒード制が廃止されてから2010年までに10のメノナイト・コロニーが建設されたが、さらに2つのコロニーが出現しつつある（Udate, vol.12-3）。

現在のホペルチェン地区は、カンペチェ州のトウモロコシ栽培の中心地帯である。メノナイトの入植によってトラクターが稼動する農地に転換されたが、1980年代から現在に至るまで転住してきたメノナイトの多くは入植の初期の段階では周辺の森林を伐採して木炭をつくり、それを売って生計を立てねばならなかったほど、農業で自立することは容易ではなかった。やせた石灰岩の土地という土壌の悪条件だけでなく、早魃やカリブ海で発生するハリケーンによって収穫寸前のトウモロコシ畑が全滅させられるという自然災害を繰り返し経験してきたからである。ホペルチェン市役所の記録によると、この地域はほぼ3年に1度はハリケーンか早魃に襲われ、5～6年に1度の豊作が辛うじて農民の生活を支えてきた。豊作が予想されていた2010年においても、メノナイト・コロニーの生存はカナダとアメリカのメノナイト社会からの経済援助とMMAのボランティアたちの活動によって支えられていたのが実情であった。



写真2 タイヤのないトラクターとカーボーイハットのメノナイト農夫



写真3 タイヤのない農薬噴霧機運搬車

IV カンペチェ州のメノナイト・コロニーの現状と展望

2010年のカンペチェ州におけるメノナイト・コロニーは、表1でみるように、推定人口の76%は保守派に属する6つのコロニーに定住していた。電気を受け入れたが車輛を拒否する中間派のトリニダード・コロニーと電気および車輛を受け入れた進歩派の6つのコロニーは、人口数では少数派であった。

エヒードの土地売買が禁止されていた1980年代に土地を取得して定住したヤルノン、チャビおよびヌエボ・プログレスの3つのコロニーは保守派に属する。このことは次のような規律が守られていることを意味している。電気を使用せず、電話・ラジオ・車輛などの現代文明の利器を所有しないことである。また馬車および荷台の車輪にタイヤを着装することは現在では認められているが、営農用のトラクターなどにゴムタイヤを着装することは禁止されている（写真2,3）。

これらの規律は贅沢と快適さを求めず質素な生活を営むことを教える聖書に基くものであったが、長い歴史の変遷過程で一部の規律は現実に即した変化をとげた。農業規模の拡大と農具・技術の進歩

に伴って灌漑や農業機械の導入が容認されているからである。もちろんこの間、それらの受入れをめぐって対立が起こり、受け入れたグループとそれを拒否するグループの分離と離散があったことについてはすでに言及したとおりである。トラクターにゴムタイヤを装着しないという現在の保守派コロニーで守られている規律は、保守派が死守する最後の規律のひとつであるように思われる。筆者が理解する限り、「外部世界と一線を画し、隔離されているコロニーから機動力のあるゴムタイヤ装着のトラクターで自由に歩出くことを禁止するためである」と、彼ら自身は考えている。しかし保守派コロニーといっても、現実には以下で紹介するように外部世界から完全に孤立しているわけではない。

これら3つの保守派コロニーは、表1のプロカンポ面積欄で示されているように、2010年の営農ではメキシコの融資制度から農業融資を受けている。定住期間の長さや融資条件である営農の安定性を考慮すると、これらの3つの保守派コロニーがメキシコ人の社会から完全に孤立したコロニーであるとは考えられない。融資のための作柄調査に伴って外部から種子の提供や営農指導を受ける。また農繁期にはメキシコ人労働者を雇用する。農作物の売却では、コロニーを取り巻く外部の社会との接触は必須である。さらに病気になれば、まずこの地域の中心都市ヘルチェンの病院に送り込まれ、日常生活に必要な物資の多くもこの街で購入している。

一方、メキシコの憲法改正によるエヒードの廃止によって農地の売買が自由になった1990年代の半ば以降に設立されたコロニーの中で保守派に属するエル・テンポラルとヌエボ・ドゥランゴもまた、種子の買い付け、農牧畜産品の売買などはすべて個人の手で行われていた。したがって先の3つの保守派コロニーと同様に、メキシコ社会

との関係は重要であり、家長である成人男性のほとんどすべてがスペイン語を話す。こうして保守派のメノナイトの成人男性はスペイン語を話す。読み書きができるのは20%ほどだという(ThiesseとWatsonの証言)。

コロニーの外観は、保守派であるか進歩派であるかに関係なく同じような景観を呈している。いずれのコロニーにも、他の地域のコロニーとほぼ同様に20戸前後を1ブロックとした「カンポ」と呼ばれる地区からなり、地区ごとに教室1つの学校が存在する。多くのカンポからなる地区には教会があるが、小さな地区ではいくつかの地区にひとつの教会が建てられている。学校も教会の建物も、その外観は、チワワ州やベリーズおよびパラグアイのもっとも開放が進んでいるコロニーを除くと、筆者が現地を訪れたベリーズ、ボリビア、アルゼンチン、パラグアイに存在する圧倒的多数の保守派コロニーと共通していて、一目でそれと判別できるほど規格化されている。すでに述べたように、学校教育ではメキシコの公教育を受け入れず、スペイン語も教えない。聖書を読むためのドイツ語教育と初歩的な算数が中心で、教師はコロニー内から選ばれる。このような条件も、他の国の保守派コロニーと同様である。

進歩派と保守派との間の大きな違いは、コロニー内で出会う車輦、電柱、女性の服装である。保守派コロニーには、すでに述べたように電気が入っておらず、自動車の利用はなく、営農のためのゴムタイヤのないトラクターが目立つ。馬車が交通の手段で、女性と子供だけで馬車を操る場合も少なくない。女性の服装は、花柄で色彩が地味な手製のワンピースに黒い前掛けをつけ、外出時にはツバの広い、大きなりボンの付いた帽子を被る。女の子の服装も成人女性とほぼ同じである(Gingerich [1970], 国本 [1999: 101-104])。

保守派コロニーから外部へ出かける場合、コロニーから最寄りの公道まで馬車で行き、そこでバスかタクシーを利用するのが普通である。またホベルチェンと大規模コロニーの間を定期的に小型バスを走らせるメキシコ人業者がいる。それらの交通手段を定期的に利用するのは成人男性である。女性と子供たちは年に数回ほどしかコロニーの外には出かけない。出かけるときには成人男性が必ず同伴する。

カンペチェ州のメノナイトの農業は基本的にはトウモロコシ栽培である。しかし先に指摘したように自然災害による不作が頻繁に発生する地域でのトウモロコシ栽培はリスクが大きい。電気を受け入れた進歩派コロニーでは電力で汲み上げた井戸水による灌漑農地でトマト (jitomate) が栽培されており、メキシコ市の業者と栽培契約をしている。一方、天水農地で栽培するメノナイトのスイカは、カンペチェ州とユカタン州内で広く知られている。ホベルチェン自治体の統計資料によると、メノナイト・コロニーの初期の段階で導入されたオレンジ、レモン、グレープフルーツなどの柑橘類の栽培はすでに放棄されてトウモロコシの栽培を中心とするものの、トマトやスイカの栽培を取り入れた営農の多角化が進んでいる (Gobierno del Estado de Campeche [2006 : 140])。

比較的規模の大きい農地を所有するメノナイト農家では、農繁期には周辺メキシコ人労働者を雇う。また農機具、各種部品、種子、農薬、肥料などを扱うホベルチェン市内の商店にとっては、メノナイトは重要な顧客となっている。乳牛を飼う農家がチーズを製造する小さな工場を協同で経営しているが、組織的な販路はまだ確立しておらず、牛乳やチーズを個々の農家が街に出て売り歩く姿もみられる。いくつかのコロニーでは農業協同組合の組織化が進められていた。

カンペチェに転住してきたこれらのメノナイト・コロニーの現状を観察する中で筆者がとくに注目したのは、先に挙げたMMAの現地事務所の存在である。アメリカ合衆国のインディアナ州に本拠を置くこの組織は、アメリカ国内外の支援者から寄付を募って、ユカタン半島に転出する保守派グループへ経済支援を行ない、支援者に毎月送るニューズレター (*Update*) でユカタン半島に転住したメノナイトの概況を英語で報告している。MMAの現地事務所は、ホベルチェン市内の中央広場に近い建物にあり、派遣された2年勤務のボランティアが運営している。彼ら自身もメノナイト信徒であるが、派遣される前にスペイン語の研修を受けるアメリカ人でメキシコの事情に疎い。事務所は、コロニーから街に出てくるメノナイトたちが立ち寄って電話、コピー機、コンピューターを利用する場を提供し、事務所の一角で聖書を中心とする宗教関係の書籍と文具およびさまざまな雑貨類を販売している。またボランティア要員はコロニー内で発生する緊急患者の病院への搬送や、諸手続きの代行、ハリケーンなどの自然災害時にカナダやアメリカから送られてくる救援物資の運搬と配分を行なう。

しかしMMAは現在のところ積極的な布教活動を行なっている様子はなく、保守派メノナイトへの支援活動を通じて自分たちの存在価値を高めようとしているだけのようにみえた。再洗礼派にはさまざまな分派が存在し、分派間の勢力拡張競争という側面も秘められているという印象を、MMAのニューズレターを通じて筆者は受けている。アメリカとカナダの再洗礼派社会 (メノナイトとアーミシュ) は、ドゥランゴ州とチワワ州内のコロニー内部の対立と分裂、およびそれに続くメキシコ国内のメノナイト保守派グループの転住にも深く関わっていることを筆者は知った。

むすびにかえて

以上の考察から見てきたことは、カトリック信仰の強いメキシコで市民権を拒否するメノナイト信徒集団が、国家からも一般市民からも肯定的に受け入れられていることである。ホペルチェン地区（ムニシピオ）に集中しているコロニーは独自の宗教共同体として自立しているが、メキシコ人の侵入を物理的に遮るものは何もない。しかしコロニーの孤立性は尊重されており、メノナイト保守派のアイデンティティが保たれている。しかもメキシコの多くの地域が治安の悪化と経済格差の極度の拡大から不安定となっていた2010年に、カンペチェ州内陸部のホペルチェン地区はメノナイトにとっては安住の地であった。そして雇用の機会もなく貧困状態にあるマヤ系先住民が独自の伝統と文化を保持しながら暮らしているのと同様に、メノナイトの保守派コロニーもまた多民族国家を自認するメキシコ政府と地域社会によってその存在が暗黙のうちに保障され、不毛な土地の開拓者として肯定的に受け入れられていることが分かった。

本稿で紹介したのは、現代メキシコのカンペチェ州に定住するメノナイト信徒集団の転住の歴史の概要とコロニーが呈する外観の一部にすぎない。宗教共同体の内部にまで迫る研究は共同体の外部の研究者の能力を超えた分野であるが、メキシコのカトリック社会の寛容性を考察するテーマとして筆者はメノナイト・コロニーの研究を続けている。

注

- (1) スペイン語による発音規則では「オベルチェン」となるが、現地ではホペルチェン (jopelchén) と発音され、マヤ語で「5つの井戸」を意味する。
- (2) 幼児洗礼への反対は、教会の墮落、教会と国家の

結びつき、信仰と良心の事柄における強制、キリスト教国間の戦争、聖職教階制などの悪の集約的表現であった（出村 [1970: 176]）。

- (3) メキシコのメノナイト・コロニーの変貌の過程を概観できる資料に、*Telefonbuch, 2008-2010* [2010] と Comité Pro Archivo Histórico y Museo Menonita [1998] がある。後者はチワワ州のメノナイト・コロニーが移住75周年を記念して編纂した写真を中心とした記念誌である。
- (4) メキシコが認めた条件は兵役・誓約・公教育の免除と宗教共同体としての存続の確約であったが、これらは1883年の移植民法が定めた開拓農民に与えられた特権に相当していた（国本 [1998a: 37]）。
- (5) メノナイトは国勢調査においても取り上げられないために正確な人口を把握することはできない。MMAは2010年のメキシコにおけるメノナイトの人口を8万と推計し、その多くはチワワ州、サカテカス州、ドゥランゴ州に定住しているとする（*Update*, vol.12-2）。
- (6) コロニーを統括する宗教指導者とその補佐役は、成人男子の構成員による選挙で選ばれるが、宗教指導者は終身その地位にあるため、その人格と信仰および教義の解釈のあり方によってコロニーの性格が決まることが知られている。規律を破って教会から破門された者は、コロニーの中では挨拶も会話も避けられ、互助組織からも外れて孤立する（Redekop and Steiner [1988]）。
- (7) この電話帳からみえることは、レストラン、各種商店、金融機関、ホテル、各種事業所など、メキシコの現代社会のほとんどすべてが存在していることである。筆者が現地調査で訪れた1997年には、チワワ州のメノナイト・コロニーは分裂状態にあった。
- (8) メキシコ革命によって確立されたエヒード制は、村落共同体単位で分譲された農地を農民に耕作権として配分された農地利用制度である。相続はできたが、売買することは禁止されていた。
- (9) 1857年の憲法によって連邦制が確立するまで、独立後のメキシコは中央集権体制下では県 (partido) 制度を、地方分権主義の連邦制下では州 (estado) 制度を採用した。
- (10) 1847年から約半世紀にわたってユカタン半島全域でマヤ族が起こした大規模な反乱。
- (11) 国勢調査によると、カンペチェ州の人口は1900年

には8万6542人、1910年には8万6661人、1921年には7万6419人、1930年には8万4630人、1940年には9万380人であった。

参考文献

<日本語文献>

- 国本伊代 [1998a] 「メキシコにおけるメノナイト信徒集団—キリスト教プロテスタント再洗礼派のメキシコ移住の経緯と現状」(『中央大学論集』第19号 31-47 ページ)。
- [1998b] 「約束の大地ラテンアメリカとメノナイト—プロテスタント再洗礼派メノナイトの流転と転住」(山田史郎ほか『移民(近代ヨーロッパの探求 I)』, ミネルヴァ書房 287-327 ページ)。
- [1999] 「ボリビアにおけるメノナイト信徒集団—キリスト教プロテスタント再洗礼派がたどり着いた最後の新天地」(『中央大学論集』第11号 93-105 ページ)。
- [2001] 「パラグアイにおけるメノナイト信徒集団—キリスト教プロテスタント再洗礼派に変貌を強いた歴史的背景と現状」(『中央大学論集』第22号 45-60 ページ)。
- [2003] 「ベリーズにおけるメノナイト信徒集団—キリスト教再洗礼派が熱帯低地に求めた新天地の建設と変貌」(『中央大学論集』第24号 55-71 ページ)。
- [2004] 「アルゼンチンにおけるメノナイト信徒集団—キリスト教再洗礼派の探した新天地ラバンパ州ヌエバエスペランサ・コロニーが経験した国家との対決」(『中央大学論集』第25号 75-91 ページ)。
- [2008] 「ブラジルのメノナイト—南部パラナ州におけるロシア難民メノナイトの定住過程」(『中央大学論集』第29号 25-45 ページ)。
- 出村彰 [1970] 『再洗礼派—宗教改革時代のラディカリストたち』 日本基督教団出版局。

<外国語文献>

- Cauche, Gaspar [2009] *Hopelchén a 50 años de su título de ciudad: 1959-2009*. Hopelchén: Ayuntamiento de Hopelchén.
- Comité Pro Archivo Histórico y Museo Menonita [1998] *75 Jahre Mennoniten in Mexico*. Mennonitischer Geschichts Verein.
- Gingerich, Melvin [1970] *Mennonite Attire Through Four*

Centuries, Breinigville: The Pennsylvania German Society.

- Gobierno del Estado de Campeche [2006] *Cuaderno estadístico municipal Hopelchén*, México, D.F.: Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática.
- Peña, Moisés T. de la, ed. [1942] *Campeche económico*, Campeche: Gobierno Constitucional del Estado de Campeche.
- Peña, Moisés T. de la [1945] “Bosquejo económico y social del Estado de Campeche,” *Boletín de la Sociedad Mexicana de Geografía y Estadística*, LX, no.4, pp.553-582.
- Redekop, Calvin W. and Samuel J. Steiner [1988] *Mennonite Identity: Historical and Contemporary Perspectives*, Lanham, MD.: University Press of America.
- Sawatzky, Harry Leonard [1971] *They Sought a Country: Mennonite Colonization in Mexico, With an Appendix on Mennonite Colonization in British Honduras*. Berkeley: University of California Press.
- Telefonbuch, 2008-2010* [2010] Cuahutémoc, Chihuahua: Casa Siemens.
- Update*, vol.12 [2010]

(くにもと・いよ／中央大学名誉教授)

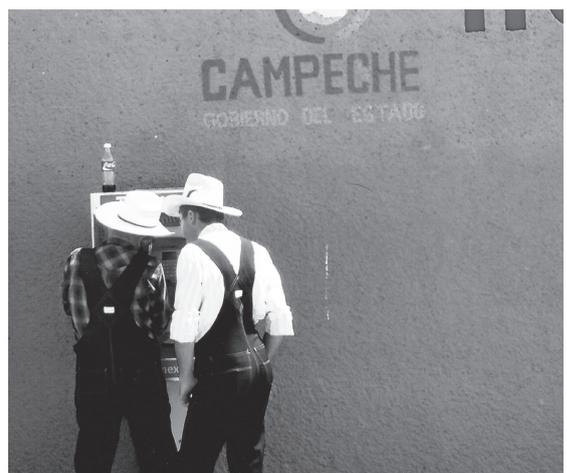


写真4 ホベルチェン市の病院の外に設置された公衆電話を利用する典型的な服装をしたメノナイト男性たち